

翻訳

オイゲン・エールリツヒ

「ビスマルクと世界大戦」（一九二〇年）

平田公夫 訳

I

わが家にビスマルク（「一八一五―一九八年」）の肖像写真が飾られたことは一度たりともなかったという告白とともに、本著を始めてもおそらく差し支えないだろう。わたしは鉄の帝国宰相の政治をほぼ自分の生涯（「一八六二―一九二二年」）を通じて注意深く追求してきた。そして、その政治が全世界から賛美されていた時代にあっても、いつも断固として手厳しく批判してきた。もちろん、わたしは自分の見解をこれまで一度も公表してこなかった。というのは、わたしは戦前には、別の仕事に全身全霊打ち込んでいて、決して政治的な論稿は書かなかつたからである。しかし、知人たちの集まりでは、とても率直に自分の政治的見解を述べてきたのがつねであった。通常、それはあまり居心地のいいことではなかった。わたしはそのため完全に孤立したし、変わり者だと見られ、しかもそれはしばしば悪い

ことだとも見なされてきたからである。戦中にはじめて、わたしは、自分がコンスタンティン・フランツなる人物と本当は実にいい仲間であることを知った。その他大勢の人と同じように、最近の出来事によってはじめてこのように考えるようになったのだろうと反論されないうために、この場でわたしは次のことを印象強く強調しておかなければならない。わたしが以下で述べることは、わたしが三〇年以上も前から心に思っていることとまったく同じものである、と。

たしかに、ビスマルクの作品（『ドイツ第二帝政』）の悲惨な崩壊に対する全責任が、彼の後継者たちにあることはきわめて明白である。そして、ビスマルクの後に舵を手にした人たちが、いささかなりとも自分たちの任に堪えたならば、これほどひどいことにはならなかつたであろうことも疑いのないところである。しかし、皇帝ヴィルヘルム二世（在位一八八八―一九一八年）のような男が、三〇年間を通じて、ほとんど邪魔されるこ

となく偉大で有能な国民の統治に失敗したなんて、そんなことがどうして可能であったのか? 「個人統治」は、まさしくビスマルクがドイツ帝国に与えた体制から直接的に生じたものであり、したがってこの体制についてビスマルクには歴史的責任がある。ビスマルクは、ドイツの体制をまったく自分の人格に合わせて作ったのだ、と言われている。そうであれば、もうそれだけで十分にひどいものである。というのは、自分が永遠に生きられないことは知っていたはずだからである。体制というものは、偉大な政治家のみならず、実際には政治家のなかで圧倒的多数を占める凡庸な人物でもそこで仕事ができるようなものでなければならぬ。つまり、体制なるものは、まさにどの国家においても残念ながら生じてくる未熟さや不都合なことを阻止するものをも作っておくべきである。ブライスの著作『アメリカン・コモンウェルス』の素晴らしい章、つまり「コモンウェルスの機能」という表題の付いた章を読んだ人ならば、誰でも、アメリカの体制が偉大にもいかにこの課題を達成しているかを知るのであり、その結果、該地でしばらくの間(政治的)「実権を握ることになったきわめてうさん臭い人びとでさえも、結局のところ、国家に対しては危険を加えることはできなかったのである。しかし、実際のところ、ビスマルクの動機はもっと深いところにあった。すなわち、彼は、自分の個人的地位を揺るぎないものにしたかったばかりでなく、むしろドイツ帝国におけるプロイセンの優位を永遠に確保したかったのであり、まさにこの目標は、帝国を完全にプロイセン国王に引き渡すという体制でもってのみ達成され得たのである。自明な

から、それによって帝国をまったく出来のよくない人物に引き渡すという危険を冒してである。

それにもかかわらず、ビスマルクの後継者たちには、あれやこれや明らかに不当な非難がなされている。彼らの進んだ道は、その大部分がすでにビスマルクによって抗いがたくあらかじめ指示されていたものであった。そうでない場合でも、その一部はまたしても、まさにビスマルクによってそのように作られていた帝国が取らざるを得なかった発展過程によって強いられたものであった。帝国が没落したのは、ヴァイルヘルム二世が道を間違えたからでも、戦争という偶然的出来事のせいでもなく、帝国という建築物に本来的な欠陥があったからである。つまり、国家体制においてばかりでなく、内政と外交政策においても欠陥があったからである。しかも、それらすべてはビスマルクにさかのぼるものである。ビスマルクは、自分が帝国そのものをそこへと追い込んだ岩礁の間をすり抜けて船を操縦できるだけの器用さをもっていたが、彼の後継者たちにはたいいその器用さはおよそ欠けていた。けれども、その舵取りが長期的にはますます困難になっていったことは、まったく看過されるべきではないだろう。たしかに、世界大戦は回避できたかもしれないが、しかし、それはビスマルク的政治、したがって、プロイセンの政治全体のいっさいの伝統との断絶という代償を払ったのみ可能であった。そのような政治を手放したくないのであれば、戦争、そして、それとともに不可避的な崩壊は遅かれ早かれやって来たに違いない。

すべての重要な人物と同じく、ビスマルクもまた、余りにも

多様すぎる要素から構成され、余りにも錯綜した性質の持ち主であったので、彼を完全に一点から説明することなどは不可能であろう。しかし、ビスマルクの本質の基本的特徴は、フリードリヒ二世以来プロイセンを支配してきた特権階級(「ユンカー層」の意味においてプロイセン的なものであった。彼の目標、彼の方法、彼の思考圏全体がプロイセン的であった。この特権階級はドイツの統一思想に対してつねに敵対的であった。というのは、彼らがプロイセンにおいて慣れ親しんでいたように、自分たちが帝国においてもそのように支配できるだろうとは思ってもいなかったからである。それゆえ、ビスマルクもまた、その初期においては統一されたドイツ帝国を獲得するための活動は決してしなかつた。彼はただプロイセンを大きくすることだけを望んだのであり、そして、オーストリアを巧みにあやつり追い出した後になって、ビスマルクはドイツ連邦内において単独の決定的な影響力を手に入れたのである。彼がいつ帝国建設の決心をしたのか、その時期を確定することは困難である。一八六六年の出来事の後になってはじめて決心したというのが本当のようだ。まず彼が建設したのはただ北ドイツ連邦だけであり(つまり、南ドイツに対する覇権は要求しなかつた)、それは拡大プロイセンにすぎないものだった。ついにビスマルクがドイツ帝国の建設に着手したとき、彼はそれによって民主主義者と自由主義者の考えを実現しただけであった。しかし、彼は、その帝国を民主主義者や自由主義者が思い描いていたものとはまったく異なるものに仕上げようと気を配つた。その結果生まれた帝国は、またもや拡大プロイセンにすぎないも

のとなつた。帝国憲法において連邦諸侯と連邦支邦国とが大事にされていることが大いに褒めあげられている。一八六六年には誰も次のことに気づかなかつた。当時、一連のドイツ諸邦(たとえばハノーファー、ヘッセン＝カッセル、ナッサウ、フランクフルト)は、いっさいの思いやりなしにプロイセンに併合されたのであり、ザクセンの場合でさえ、ナポレオン三世(在位一八五二―七〇年)の攻撃が切迫し実行に移される前にオーストリアとの戦争を終わらせるためだけに、「(その併合は)思いとどまられたのである。このときもビスマルクのなかで勝利した考えは、この形態(「帝国の憲法体制」)においてドイツ諸部族の自由の何ほどかを帝国において保持するという法思想では決してなく、南ドイツの諸邦がプロイセンの支配を長期にわたりに安んじて堪えるのは、それらの諸邦が同時に内政において高度の自立性を保ち続けるときのみであるという洞察であつた。こうして南ドイツの諸邦には連邦支邦国としての自治が与えられたが、そのためには、プロイセンの優越的地位、つまり、外交政策全般と軍事の執行、ならびに、その他一連の特権をプロイセンに認めるという代償を払わなければならなかつた。プロイセンを手中に収めていたユンカーのために、まさに可能な限り、ドイツにおける支配を確保してやるという基本思想は明々白々であつた。

ビスマルクが社会の道徳的諸力に対していくらかの理解をもつていたことは疑いない。しかし、ビスマルクなら、内政にしろ外政にしろ、政治が何らかの仕方ですのような諸力に左右させられることを、まったく無邪気な行為だとみなしたのであろう

ことは確かである。イギリスの国政家は以前から、とくにパーマストン³以来、社会の道徳的諸力を自分の意図のために活用する大家であったが、そのような術についてビスマルクは何一つもつていなかった。人が、その諸力を用いるためには、少なくともその何ほどかはその人自身の胸のなかにもつていなければならないからである。ビスマルクにとつて、それらは、まさにそこにあるがゆえに騎手は取り除かなければならない不愉快な障害物であった。そうでない場合には、それらはビスマルクにとつて何の意味ももたなかった。ビスマルクはそれらを軽蔑的に不可量物と呼んだ。戦争を惹き起こすためには電報を偽造するような男が〔「フランスを挑発するような電文に改竄した、有名な一八七〇年七月のエムス電報の件」、道徳的な良心の咎めに苦しまなかったことは確かである。自分にとつてそうすることとが有益だと思われた場合には、ビスマルクは反オーストリアのハンガリーの反逆者とも同盟を結んだし、フランスとの戦争においてイタリアの介入が切迫したときには、それに反対するイタリアの共和主義者とも同盟を結んだ——そして、彼らが余計なものになったときには、かつての同盟者をいとも平然とお払い箱にしたのであった。一八六六年にビスマルクはオーストリアとの講和において、ずる賢くひねり出された〔イタリアとの〕⁴同盟条約を引き合いに出し、笑いながらイタリアを見捨てたし、また、クラプカ〔「ハンガリー革命軍指導者」〕義勇軍がウィーン政府にほんの少しばかり恐怖を抱かせるべき責任を果たした後、義勇軍をその運命に委ねたようなやり方は、ビスマルク教信者のフリートユング⁵にさえもおらずおすと憤慨の言葉

を吐かせたのであった。

いかなる偏見のない人も否定することのできない偉大さという特徴をビスマルクに付与するのは、彼の政治の主導的思想ではない。ビスマルクにプロイセン指導下におけるドイツ統一という思想を抱いて欲しかったとは、誰であれ、要求できないことである。ドイツ統一思想はその当時小ドイツ派全体の共有財産であった。そして、オーストリアの支持者や諸邦分立主義者を別にすれば、この考えに反対していたのは、プロイセンの保守派のみであった。この統一思想が万一ドイツで開花したならば、プロイセンにおける彼らの専一的支配が脅かされると怖れていたからである。もつとも——保守派がその統一思想をつぶさなかったならば、プロイセン指導下における統一ドイツをすでに一八四八年に手にすることができたであろう。たしかに、ビスマルクがこの思想を結局のところ自らわが物とし、その思想を目標達成に至るまで粘り強く追求したことは、一つの功績であった。それに対して、今日では、ビスマルクがドイツを最も重要な点において意のままにするべく、プロイセンに引き渡したようなやり方で統一を成し遂げたことを高く評価する人はほとんどいないであろう。その作品〔「統一ドイツ帝国」〕が完成されたその瞬間から、ビスマルクの政治からはいっさいの偉大な思想が欠落する。いやそれどころか、統一性のある思想さえも欠落するのである。彼の行動のみならず、演説や手紙や回想録のなかを探し求めても、それは見つからないであろう。ビスマルクはケース・バイ・ケースで決断する人であり、すべては、勝利の果実を平穩に享受すること、万一厄介事が起

これは、それを瞬時に片づけることにのみ向けられていた。ビスマルクの後期の政治はともかくも平和的なものであると言われるかも知れないが、しかし、それは、たとえばどの要求をもそれが正当かどうかを公平に検証し、その検証に合格したとき、その要求を承認したグラッドストンの政治の意味においてではない。たしかに、ビスマルクもまた時おりそうしたことを行ったが(シユネーベル事件、カロリン諸島紛争⁷⁾、しかしながら、その理由はただ、彼にとつてその状況が不都合であったからか、あるいは、そのゲームが蹴り出すだけの価値がないと思われたからにすぎない。一般的には、彼は最後まで、定評ある古プロイセンのお手本(「フリードリヒ大王」)に倣つて、正当な要求に対してもはるかに優勢な実力手段を対峙させることによつて平和を維持することの方を好んだのである。

大いに賛美された国政家から、その国政府の大いなる目標について、あるいは、国政府一般について何ほどかを学ぼうと、ビスマルクの『思索と回想』(一八九八年)を手にとつた人ならば、誰であれ、幻滅してその本を投げ出すであらう。そこには、外交ゲームと政治ゲームにおいて、自分は直接的、実際的な成功を目指し、つねにそれを実現しようと努めてきたとか、また、自力で切り抜けるために使つた資金がいかに少なかったとか、自分がうまく危地を脱するために用いた策略がいかなるものであつたかということ以外、ほとんど何も語られていないからである。ビスマルクを正當に評価しようとするのであれば、誰しも実際のところ、創造的な政治思想の持ち主としてではなく、偉大な外交の技巧家として評価するのがいい。というのは、実

際のところ、彼はその点においては感嘆すべき人物だからである。そして、そこで用いられるのは、もちろんつねに同一の術である。とりわけ、ビスマルクは次の点でまったく偉大であつた。すなわち、ビスマルクは自分の目的のためにはつねに完全装備の軍隊を出動させる準備を済ませていたこと、そして、彼はどの敵に対してもつねにバラバラに分断させる術を知つていたし、その分断を成し遂げるまでは、他の敵を拘束力のない口約束やあいまいな約束によつて食い止めておく術を知つていたことである。ビスマルクは軍事的な関係について確かな目測能力をもつていた。ビスマルクはいつも弱者とだけ張り合い、この弱者に対し、はるかに優勢な軍隊を対峙させることをつねに考へていた。彼は、自分に堪えられないような同盟はどれも阻止すること、脅威となる連合にはどれも先手を打つて時機を得た講和締結によつて未然に防ぐことを心得ていた。こうして彼はフランクフルト講和条約⁹⁾に至るまですべて成功を収めてきた。後になるとビスマルクはもはや戦争は行わず、緊急事態にはいくらか武力をちらつかせて脅すこと、すなわち、あちこちで「冷たい放水」をすることで十分であつた¹⁰⁾。つまり、彼がどんな人物であるかはよく知られており、また、彼が無駄に脅しはしないと知られていたからである。しかし、ビスマルクは最後までとりわけ軍隊には気を配つていた。つまり、七年制予算案はつねに彼の関心の中心にあつた。

それ(「軍隊」)は、結局のところ、伝統的な外交政策の古くからの、実に古くからの家庭常備薬である。そして、それがプロイセンにおいて以上によく知られたところは他になかつた。

たしかに、ビスマルクはフリードリヒ二世の政治に内容の点では何も付け加えなかった、と言っているいだらう。つまり、新しくしたのは、ただ、彼がその道具を使う際に用いた完成された名人業であつた。じつに「国王という」本職以外においてもきわめて音楽的センスのあつた「フリッツ爺さん」¹¹フリードリヒ大王の愛称¹²は、すでににして、「武器のない交渉は楽器のない楽譜のようなものである」と言うのがつねであつたし、また、プロイセンの聖人天国において第三の偉大な聖人であるクラウゼヴィッツ¹³は、戦争は別の手段で行う政治の継続である、と教えている。

ビスマルクの政治は数々の大成功に彩られていたが、彼の作品は永遠のものではなかった。諸々の成功は一過性のものであり、それはその成功それ自身のせいであつた。その成功はまったく技巧あればこそのものであり、技巧の大家は稀にしかいないものである。それゆえ、ビスマルクの政治は、彼よりもはるかに劣っている後継者たちが無造作に引き継いではいけなものであつた。そうであるけれどもビスマルクは、彼らが引き返すのをきわめて困難に、いやそれどころか、不可能にしていたのである。すでにビスマルクがあまり変えることのできない状況を作り出していたからである。彼はいつも実力のみを崇拜していたので、存命中、軍事的に十分に装備された国家のみを、より正確に言えば、そのような政府のみを当てにしていたにすぎない。というのは、このような政府のみが軍隊を意のままにするからである。ビスマルクは小国をないがしろにしたし、そうすることが自分に有益だと思われたときには、その小国を乱

暴に扱つてもいいとさえ思つていた。彼にとつて同じく価値のないものと思われたのは、たとえば諸国民であり、社会における気分や潮流であり、世論やその他の「不可量物」であつた。しかし、暴力を前に後退する弱者は、つねに、好機あらばふたたび戦いに挑むという留保つきでそうするものである。ビスマルクは、自分によつて踏みつぶされた者の無力な憤怒など、たいてい意に介さなかつた。しかしながら、弱者が弱者であるのは、バラバラに孤立している場合のみである。ビスマルクは、ドイツ帝国に君臨していた長期間にわたつて、とても多くの人を怒らせ傷つけてきたので、彼が「同盟の悪夢」(cauchemar des coalitions)にうなされ、絶えず悩まされていたことはまったく理由がないわけではない。たしかに、ビスマルクはその偉大なる術でもつて、決定的な瞬間には敵を分断することに相変わらず成功していた。しかし、それは次第次第に困難になつていった。誰かを頻繁に計略にかければかけるほど、その人はそれだけいっそう強く将来において用心するようになるからである。その場合、まさしくビスマルクがいつも「不可量物」について抱いていた軽蔑の念ゆえに、彼には宥和的な度量の広さというものがいっさい欠けていた。ビスマルクが他人に肩入れをするとき、彼は自分自身のために何かをまんとせしめるつもりだ、と人はすぐに気づくのであつた。ビスマルクは反対給付が確約されない限り、誰かに親切心を示したことはなかつた。彼は「君が与えるように私は与える」(du mi gibst)の原則を、あからさまに標榜していた。ビスマルクが生涯の後半において、いかに戦争を回避しようと努めたにせよ、彼の政治の本質には、

最後の逃げ道としての戦争をつねに計算に入れている面があった。しかし、戦争はいずれにしても危険なゲームである。戦争についても何ほどか心得のあったローマ人の口ぐせは、「戦争は不確定な出来事である」(belli dubius eventus) というものであった。軍事状況に対する確実な目測のおかげで、ビスマルクはともかくも戦争を取行することができた。しかし、ビスマルクがそれによって後継者たちに遺したものは負の遺産であった。経験の教えるところによれば、きわめて腕の立つ賭事師でも、一か八かの大博打ちをくり返したあげく、結局のところ、最後にはすってしまふものである。

II

帝国が三つの戦争によって建設された後、ドイツ国民に経済的・文化的発展のチャンスを与えるために、平穩な路線をとることは、ビスマルクの当を得た考え方であった。この目標を達成するためには、ドイツ帝国とドイツ国民とに必死になって友人を獲得してやること、利益共同体として結成され、それぞれの国民の心のなかに根を下ろしているような同盟を探すことが重要であった。オーストリアとの同盟はたしかにこの種のものではなかった。というのは、オーストリア＝ハンガリーの国境が囲んでいたのは、一つの民族ではなく、一つの国家であったからである。フランスと同盟を結ぶ方がそれよりもはるかに容易であつたらう。一八七〇年の戦争は、フランス人にとつて、当初は単にナポレオン三世に対する戦争であると思われていた。フランス国民の大多数に憎まれていた帝政が崩壊し、ドイ

ツ統一のこの障害が取り除かれたことによつて、たしかにフランス国民に対し和解の手を差し伸べ、寛大な講和を締結することは可能であつたらう。この絶好のチャンスにビスマルクはまったく気づかなかつた。しかも、それ以外の場合でも、彼の政治は賢明なものではなかつた。ビスマルクはまったくすべてを統治する側に合わせていたのであり、そして、自分が獲得できなかった人に対しては努めて威圧しようとしたからである。

ビスマルクの生涯の末期、ドイツにとつて多くの敵はいたが、誠実な友人はただの一人もいなかった。敵対心はいずれも本物であつた。というのは、敵対心は、彼の政治が惹き起こした憎悪に基づいていたからである。友情は偽物であつた。というのは、友情は政府とのみ結ばれたものであつて、社会と結ばれたものではなかつたからである。どの政府も社会の影響から永遠に逃れることはできないものである。不可量物の重要性はこの点にある。ビスマルクよりもはるかに正当にこの点を評価していたのは、彼の同時代人・デイズレーリ¹²⁾であつた。デイズレーリが、教皇庁と秘密結社とはヨーロッパにおける唯一の現実の力であると述べたとき、そうであつた。その際、デイズレーリ¹³⁾にとつては、自明のことながら、教皇庁と秘密結社とが、外的な暴力手段を用いることなしに人びとの心を支配する諸力すべてについてのただ一つの表現であつたからである。

このように、ドイツが世界大戦で敗れた世界連合は、本当を言えば、ドイツ自身によつてすでに準備されたものであつた。もしプラハ講和条約¹⁴⁾においてナポレオン三世の圧力によりオーストリアも承認した住民投票が北シユレスヴィヒにおいて行

わかれていたならば、**デンマーク**と和解することはドイツにとつてとても容易なことであつたらう。北シユレスヴィヒのデンマーク人が居住している狭い帯状地帯のいつたい何がドイツ帝国にとつて大事だつたのか？ しかも、多くの連隊のようにデンマークを戦争に引き込むことができたのも最善であつたのか？ こうして数年後、オーストリアと締結したある協定において、この規定を削除させることの方をドイツ帝国は選んだのである。デンマークには異議申立ての権利がなかった。じつにデンマークはブラハ講和条約の当事者ではなかったからである。ところで、**デンマーク**はたしかに小国ではあるが、**デンマーク**王室は、ロシアとイギリスにおいてきわめて価値のある関係をもつていた。ロシアとイギリスに見られる、またそれ以上にギリシアにも見られる、反ドイツの敵対心に**デンマーク**がどれほどの関与をしていたのかということ——この敵対心は最終的に反ドイツ世界連合にまでつながつたものである——教授資格請求論文のやりがいのある研究対象であるだろう。いずれにしても、**デンマーク**の関与は必ずしも僅少なものではなかった。

反ドイツの敵対心がもつと強く現われたのは、**ビスマルク**のフランスに対する姿勢においてであつた。彼はもちろん、ローリンゲン¹のフランス領を決して欲しがらないだけの洞察力は十分もつていた。しかし、プロイセンの將軍たちがそれを望み、また、フランスの軍事力が彼の思惑通りに粉砕されてしまったので、**ビスマルク**は平穩にその地域を掠めとつたのである。それによつて得られた成果は、ドイツは自らがどのような動きを起こそうとも、フランスを和解のできない背後の敵として考慮

に入れなければならないというものであつた。**ビスマルク**は自らそのことを語つていた。すなわち、今後、フランスは反ドイツ連合なら何であれ、その肩をもつことができる、と。ただ、その場合にフランスだけが問題ではなかつた。フランスの歴史的地位、その社会的諸関係、精神生活のあらゆる領域における偉大な業績、すなわち芸術、学問、文学における偉大な業績、パリという都市の魅力、すなわちパリには見たり学んだりするために世界中から最良の頭脳がやつて来るし、また、世界の最も裕福な人たちが楽しむためにやつて来るという都市パリの魅力、フランスの愛すべき価値あるものや礼儀正しさ、最後にフランス外交の巧みさのおかげで、国家としてのフランスと民族としてのフランス人がその影響力を及ぼさないような所は、この地上のどの片隅にさえも無いからである。そう言うことができるのには理由がある。すなわち、**フランクフルト講和条約**によつて後の反ドイツ世界連合のための礎石が据えられたからである。もちろんドイツでは、フランス人はエルザス・ローリンゲンを奪いとられなかつたとしても、報復を止めることとはないだろう、という声がしばしば聞こえる。それは、古いタイプのドイツ人の政治談義のなかでつねに繰り返されるドイツ語の接続法である。そのようなドイツ人に対して、彼らの無思慮な政治がどのような結果を招いたのか、その点を指摘するならば、彼らは、それと反対の行つていたとしても、まさしく結果は同じであつただろう、と返答するのがつねである。それは、原因はいかなる結果も伴わないというきわめて特殊な考え方に基づいている。フランスからエルザス・ローリンゲ

ンが奪われなかったとしても、その場合でも、おそらく、フランス人のなかには敗戦に甘んじない一定の軍国主義的な小グループがいたかもしれない。しかし、フランス国民の大多数が甘んじたくなかったこと、それは、まさにエルザス・ロートリンゲンを失うことであつた。いずれにしても、ドイツに対する激しい敵対心は決してこの範圍に収まりきらなかつたのである。そして、もしこの敵対心がなかつたならば、ひよつとすると、両国の多くの人に望まれた同盟さえもが成立していたかもしれないだろう。

ビスマルクはオーストリアを、周知のように、すでにプラハ講和条約締結の際には温かく遇していた。一八六六年のビスマルクの行動は賢明なものであつたが、同盟を結ぶという基本的な考え方はまったく間違つていた。それはまたしても、ビスマルクにとつて、諸国民および彼らの感情や伝統は「不可量物」に他ならなかつたということを考慮に入れることによつてのみ、納得がいくだろう。ドイツはオーストリアの存続に関心をもつていたが、しかし、国民の四分の三もがスラブ人から成つている国家が、ドイツとロシアが戦争することになつた場合、その国内が崩壊することなく、ドイツの味方になることができらう、と期待することはできなかつた。もしある国家の住民の大多数が外交政策をまさしく重大な侮辱と感じざるを得ないのであれば、その国家が強国であり続けることは、本当のところまづたく不可能なことである。かくして、その同盟(「独逸同盟(一八七九年)」は決定的瞬間にドイツを救わず、しかも、それはオーストリアを奈落の底へと道連れにしたのであつ

た。

ドイツの第二の同盟国はイタリアであつた。クリスピン¹⁵がフランスと気まづくなつて、ビスマルクに同盟の話をもちかけてきたとき、ビスマルクはこの同盟を受け入れた。しかし、その同盟は前々から笑ひものであつた。もしビスマルクがそれについて本当に真面目に考えていたのだと思ひたいのであれば、それはビスマルクの明敏さをたしかに傷つけることになるであらう。イタリアは対オーストリア戦以上に熱心に戦争の準備をしたことはなかつたし、オーストリアはイタリア以上に不倶戴天の敵をもつたことがなかつた。それなのに、ドイツと同盟を結べば、両国は力を合わせて戦う運命になるからである。それに、経済的、社会的、精神的な数限りない絆によつて結ばれているフランスに対して、イタリア国民のなかの多数のかつ政治的にきわめて重要な階層が抱いている強い好感情、および、いわゆる「ラテン」民族という共同体が付け加わつた。それはまさに不可量物にすぎなかつたがゆえに、もちろんビスマルクにはまたもや氣にならない事柄であつた。

友好的な関係および起こり得る同盟関係については、なおイギリスとロシアとが考慮された。当時はまだ両帝国がきわめて激しく対立していたので、ビスマルクには両国とともに歩むことなど思ひもつかなかつた。つまり、ビスマルクはどちらかを選ばなければならなかつたのである。イギリスの軍事力に対するビスマルクの評価は低く、さらに、彼はイギリス政治の自由主義的精神のゆえにイギリスを不快に思つていた。かくして彼はロシアを選んだが、それはロシアの強力な軍隊に感銘を覚え

ていたし、また、ロシアはいつも反動の砦であったため、ロシアが好きだったからである。その選択は、たしかにビスマルクの失敗のなかでも最大の破滅のものになったものであった。イギリスはその当時ただちにドイツと誠実な同盟関係を結ぶ必要があった。イギリスのアジア領土がロシアによって絶えず脅かされていたという理由からしても、すでにしてそうであった。もし「イギリスと」同盟を結んでいなければ、イギリスはドイツの植民地政策に対して計り知れないほどの支持を与えたことであろう。また、戦争になった場合、イギリス艦隊がドイツに対してどれほど貢献することができたことか、今日では誰の目にも明らかである。

ロシアとの同盟はいずれにしても壊れやすいものであった。ロシアはオーストリア・ハンガリー、トルコ、そしてイギリスに対して戦争を計画していた。しかし、オーストリアとの戦争に対して、ビスマルクは「ロシアと」共同歩調をとることは許されなかった。トルコとは戦争をする必要はなかった。イギリスに対しては戦争を敢行することはできなかった。したがって、もし「ロシアとの」同盟が結ばれたとしても、その同盟はあまり利益のあるものではなかった。実際、イギリスはドイツにとって攻撃できる国ではなかったからである。そのうえ、親ドイツ的な傾向はロシアの宮廷にも社会にもほとんど存在していなかった。自分の目標のためにフランスの援助を計算に入れていたのは強力なパン・スラブ主義の党派であった。そしてそれ以外でもロシアにおけるフランスの影響力はいつも決定的なものであった。ロシアとしては、どんなにうまくいったとしても、

「ドイツと」フランスとの戦争において不確かな中立以外の何もビスマルクに提供することはできなかった。ビスマルクは「ロシアとオーストリアとの」戦争においてロシアに中立を約束することは決してできなかった。というのは、実際ドイツはオーストリアおよび東洋において大きな利益をもっていたのである、それはロシアの利益と両立することができないように思われたからである。実際のところ、ビスマルクはベルリン会議の期間中、自分の意思とは裏腹に、四圍の状況から最も重要な諸問題においてロシアを見捨て、イギリスの側につかざるを得なかった。それ以来、ロシア人はビスマルクのこの仕打ちを忘れることは決してなかった。

ビスマルクが後になつて実際にロシアと締結した同盟は、少し前に公表されたのであるが、いわゆる「再保障条約」であった。再保障の意味は、ドイツとロシアはある大国との戦争において互いに好意的中立を確約する、しかしながら、これら両国のいずれかがオーストリア・ハンガリーあるいはフランスに対して攻撃を行った場合には、この中立の約束は効力をもつものではないという点にある。したがって、この条約は、とりわけオーストリア・ハンガリーがロシアを攻撃した場合に有効なものとなるはずのものであった。それは、言葉通りにとれば、「ドイツと」オーストリア・ハンガリーとの条約に反していた。というのは、この条約は、またしてもロシアがオーストリア・ハンガリーを攻撃した場合についてのみ書かれていたからである。しかし、それは、真面目に考えてみると、ロシアにとつて無価値のものであった。なぜなら、オーストリアが、ドイツの有効な

支持なしに、また、背後にイタリヤをかかえたまま、敢えてロシアに対して侵略戦争をしかけることなど、冒險主義的な考えだからである。それが一つの意味をもつのは、戦争において、他国が攻撃してきたとつねに主張できることから出発する場合のみであった。したがって、その前提となるのは、ビスマルクが実際のところ人の知らないある諸条件のもとで、オーストリアハンガリーに対抗するロシアを援助するためにロシアと同盟を結んだということだろう、その際、オーストリアは侵略者だとされてしまうのである。そのような同盟の卑劣さは、同盟国のオーストリアハンガリーに対して秘密にされていたとすれば、なおのことひどいものであつたらう。しかし、実際には、ビスマルクが本当にそう考えていたという徴候は皆無である。フランスに関する規定からは、ドイツ側から攻撃があつた場合にはフランスの救助に駆けつけることを、ロシアが留保していたことは明らかである。独仏戦争が起るとすれば、いずれの戦争もロシアにとつてはドイツの侵略戦争であることは自明のことなので、この保障が現実のものとなり得るようなケースを想像することはきわめて困難である。「再保障条約」はそれゆえ本質的に外交上のお遊びにすぎなかつたし、たしかにロシアはそうとしか見ていなかった。また、ビスマルク自身がその点を見逃すことはあり得なかつた。ヴェルヘルム政治はロシアの心臓部につながるまでには至らず、ロシアとの連絡を途絶えさせてしまったと、なぜビスマルクがあとからヴェルヘルム政治をあれほど辛辣に非難したのか、それはまったく理解に苦しむことである。ロシアにとつて決定的となるのは、バルカン半

島の現状 (status quo) 維持に関するそれに続く合意であつただろう。その合意はたしかにまず第一にオーストリアのオリエント計画に向けられていた。その種のものは「同盟」という名に値するものでは決してなかつた。再保障条約は、今日明らかになつていくように、主としてオリエント政策に関する合意であつた。

III

ビスマルクの帝国内国民政策は同種のものであつた。北シユレスヴィヒにおいてまったく危険性のない少数のデンマーク人の自決権が奪われただけでなく、苦しめられてもいたことは、もうすでにして十分にひどいことだつた。というのは、そのためデンマークはドイツに対してもっとも腹を立てていたに違いないからである。それ以上に重大なものだつたのはエルザス・ロートリンゲンでの行動であつた。この二つの地方が、公式文書にあるように、旧帝国領土としてドイツに併合されるならば、エルザス・ロートリンゲン人はまさに最初から完全にドイツ人として扱われなければならなかつたであらう。支邦国家としてのエルザス・ロートリンゲンには、他の支邦国家と同一の自治が認められるべきであつたらう。たしかに、それによつて必ずしもすべてのエルザス人の怒りがなだめられることはなかつたであらうが、しかし、住民の大部分はフランスの〔統治〕時代にはもつていながかつた自治の利益を十分に評価したであらう。彼らはやがて自分をドイツ人としてでもなく、ましてやフランス人としてでもなく、単にエルザス・ロートリンゲン

人と感じるようになったであろう。そして、彼らをそのままの状態にしておくこともできたであろう。おそらく、フランス国内のフランス人も、エルザス・ロートリンゲン人が現状の変更をまったく望んでいないことを知ったならば、それに甘んじたであろう。しかし、彼らがビスマルクから受けた扱いは、同権の市民の地位ではなく、臣民の地位であった。それによってたしかに行政はかなりやりやすくなったが、しかし、同時に至るところで、克服し難い政治的困難さが生まれたのであった。

しかしながら、最も理解できないのは、ビスマルクのポーランド人政策である。ロシアとの戦争は場合によっては回避できないだろうということ、ビスマルクが見落とすことはあり得なかったもので、深い憎悪の念によってロシア人から分断されているポーランド人をあらゆる手を尽くしてドイツにつなぎとめておくことは、たしかに至極当然なことだった。もしポーランド人をドイツにつなぎとめておくことができたならば、ドイツ人はロシア・ポーランドへの進軍に際し、至るところで解放者として歓迎されたことであろう。それに反して、ビスマルクはここでも国民を抑圧する政策を優先し、その結果、ポーランド人は、結局のところ、自分たちの独立をドイツの手から受け取りたいと思ったことは一度もなかったのである。

ビスマルクの国内政策は、つまるところ対外政策と同一の本質的特徴を示している。この偉大な国政家はここでも、実力ですべてを整備できると信じており、そのため彼が暴力で片づけられない抵抗をかえって呼び起こすのである。ビスマルクはデนมーカー人を打ち破れなかった。彼はエルザス・ロートリンゲ

ン人をはじめて熱烈なフランス人にしてしまった。彼はポーゼン(「ポーランド中西部の商工業都市。一九四五年までドイツ領であった」)ですでに相当衰えていたポーランド人魂に事実上新たな活力を与えてしまった。ビスマルクはそれ以外のところでも同じように行動し、至るところで、自分が得ようと努力したものと反対のものを手にしたのであった。帝国建設後のビスマルクの最初の行動の一つは「文化闘争」であった。それは、一九世紀後半におけるまったく明らかな宗教迫害であったし、たしかにもはやそれが可能だとは誰も思わないようなものであった。その後の結果もまた次のようなものだった。つまり、ドイツのカトリックたちは一つの政党(中央党)に結集する決心をし、この党はやがて、ビスマルクが闘争を諦めざるを得なくなるほど、強大なものになったのである。今日に至るまでたしかにドイツは、国内に純粹に宗教的基盤に立つ大政党を擁する、ヨーロッパ文明の唯一の国家である。この政党はすでにビスマルク時代に決定的な存在となっており、今日に至るまでそうあり続けている。それに続いてビスマルクは社会民主党との闘いを始めた。社会民主党がドイツで世界のどこにも見られないような隆盛を極めたのは、たしかにビスマルクのおかげである。その闘いがいかに余計なものであったことか、このビスマルクによって「帝国の敵」と烙印を押されたドイツ社会民主党がいかに無害であり、いかに扱いやすく、また、その心根がいかに国家に従順なものであったかは、戦時中に明らかになった。詩ではいっただいのように表現されるだろうか、「汝の最も貧しき息子が汝の最も忠実なる息子であったとは!」

世界大戦の開始時におけるドイツの命とりとなる状況の予兆は、ビスマルクがまだ舵取りを握っていたとき、すでにあつた。フランスとロシアとの同盟はすでにビスマルクの解任(一八九〇年三月)前に着手されていたし「露仏同盟は一八九一年から九四年」、イギリスは頑強に「ドイツを」拒否していた。多くの国々の世論はドイツに対して憤激していた。また、敵対的な潮流は至るところで盛んにフランスから養分を得ていた。ビスマルクは政府間の同盟に理解し難いほど大きな価値を置いていたが、そのような国民の頭越しに行われる政府との紙の上だけの同盟システムを維持することは、政府が最終的に国民に依拠する時代には不可能になっていた。すでに八〇年代には戦争の危機が二つの前線(ロシアとフランス)で迫っていた。その戦争は回避されたが、その理由は、まさにその当時はドイツが戦争を望まず、またアレクサンドル三世(在位一八一―一九四年)は戦争に負ければ命を失うだろうと分かっていたからである。もし戦争が勃発していたならば、ドイツは、世界大戦と同じようににウィーン政府と一緒に孤立していただろう。ドイツ帝国の声望は、もちろん、ビスマルクが帝国を導いていた限り、大いなるものであつた。というのは、世界はビスマルクの過去の成功に目をくらまされておき、そして、彼の手段は、政治とはまったく関係のない好都合な状況によって抗し難いものに成長していたからである。それに反して、帝国の弱い立場ははつきりとは見えてこなかつた。なぜなら、ビスマルクが「満ち足りている」「現状に満足している」と宣言し、一般的に、もはや積極的に何かあるものを得ようとは努力しなかつたからである。

しかし、この受動性は彼にとつて無理強いさせられたものだった。つまり、ドイツは至るところで衝突することなしに身を動かすことはできなかつたし、ビスマルクのように物事を深く洞察できる人は、たしかにそのことを見落とすことはなかつたからである。ビスマルクが受動的姿勢を捨てたところでは、いまや至るところで明示および黙示の障害に出合つた。たとえば、彼がフランスを脅した一八七四年にゴルチャコフのもとで(「回想録」のなかの「ゴルチャコフはフランスを庇護している」という憤激の言葉を参照せよ)、そうしてベルリン会議の間中に、また植民地政策においてもそうである。有名な包圍政策はそれゆえすでにビスマルクによつて招き入れられていたのである。それは、ヴェルヘルム二世のような無思慮の天才がいなければ、それほど完璧なものにはならなかつたにしても、徐々に自ずから生じたものだった。ヴェルヘルム二世は、ああ、まったく余計な艦隊政策によつて、ドイツがまたともにやつていくことのできたであろう最後の強国(イギリス)を挑発し、ほぼ一世紀という古くからの対立によつて分断されていたイギリスとロシアの同盟(一九〇七年の英露協商)という奇跡を気楽にも成立させたのであつた。

さて、もちろん、一七世紀および一八世紀においてイギリスは、実力行使と純粹に外交上の同盟政策という「ビスマルクと同様の政策によつて世界強国としての基礎を築いたのであつた。しかし、それはまさに一七世紀および一八世紀のことであつた。当時は陰險なアルビオン(「イギリスの古名」という言葉が成立していた、ところが当時はその言葉が害を及ぼすこと

はできなかつた。しかし、イギリスの国政府の偉大さは、それを時代の変化とともに変化させることであつた。一九世紀初頭以来、ヨーロッパ文明の諸国民に対する実力行動はほとんどなくなつてゐる。すなわち、クリミア戦争（一八五三—五六年）が、世界大戦に至るまでイギリスがヨーロッパの地で行つた最後の戦争である。何か要求を掲げなければならぬ場合、イギリスはつねにその要求を誠実に理由づけようと努めてゐる。地球上のどこにおいてもイギリスは、国民的、宗教的、政治的自由という偉大な理念のために戦う人びとの側に立つてゐる。やがて諸国民は、あらゆる自由主義的な運動の岩をイギリスに見出すことに慣れてしまつたのである。ドイツではしばしばイギリスの偽善ということが人の口にのぼる。つねにイギリスの利害が問題になつてゐるのだ、しかも、イギリスはかつて、自国の利害のためには、政治的反動、宗教的弾圧、国民的虐殺をも支援したではないか、と。偽善という非難は道徳的な価値判断に基づいており、その非難が仮借ない暴力行使という非難よりも道徳的により重いものであるかどうかは、一つの問題である。イギリス人は、その自由主義的な対外政策によつて大きな利益を手にしてきた。なぜなら、イギリス人はそれによつて諸国民から好意を抱かれるようになったからである。イギリス人は本當のところは、そのような利益を得ようと欲し努力してきたのだらうといふことは、多くの場合、その政治家たち、とりわけグラッドストーンについて立証することはできない。また、いづれにしてもイギリス国民については当てはまらない。といふのは、偉大な倫理的理念に満ちた国政府といふものは、事実上、

イギリスの広範な社会層の感情および多くの本物のイギリスの政治家たちの努力に合致するものだからである。しかし、それがどうであれ、偽善は少なくとも徳の前では首を垂れるものであり、それゆゑ、どんなことがあつても裸の野蛮性よりも優先されるべきものである。偽善は偽善者に対し、ともかくも乱暴者が知らない多くの障害を押しつける。そして、文明化されたヨーロッパ人が、偽善が生み出す雰囲気のなかで心地よく感じることができないにしても、ヨーロッパ人は通例そのなかで少なくとも呼吸することはできる。イギリス人が前世紀においてヨーロッパ起源の民族に対して、ビスマルクのやり方を想起させるようなやり方で行動をとつたのはただ一回のみであつた。それはポーリア人に対する戦いにおいてであつた。その後の結果もまた、全ヨーロッパによる全般的な怒号であつた。ヴェルヘルム皇帝もまた少なくとも当初はそれに同調してゐた。残念ながら、彼はそこから何も学ばなかつた。けれども、エルザス＝ロートリンゲンにおけるビスマルクとは違つて、イギリス人は、戦争が終結するやすぐにポーリア人に対しても完全な自治を保障したのである。

IV

ビスマルクについてはいまだ、その全人格をわれわれに見せてくれるような彼のシェイクスピアは現われてゐない。その野性的な力と単純な偉大さにおいて、ビスマルクはまさに王の悲劇やローマの演劇におけるいろいろな人物を想起させるからである。ここでは、第一級の詩人のみがその任に堪えるような戯

曲が試みられるべきではない。つまり、彼の行動や言葉に表われているようなビスマルクの本質の基本的傾向は何であるのか、それについてのみ問われるべきである。ビスマルクがその初期においてドイツ人ではなく、単にプロイセン人であったことについて、今日ではもはやほとんど異論がなくなっている。後になって、ビスマルクはドイツ帝国に対して、どの創造者も自分自身の作品そのものに対して抱くような愛情をもつたのかもしれない。しかし、そのような後天性の、後からくつつけられた感情には、つねに根源的な本性が欠けている。ドイツの芸術、学問、文学に対して、ビスマルクは生涯を通じて、彼の光り輝くお手本、つまりフリードリヒ二世と同じように疎遠な態度をとってきた。創造的精神の持ち主は、ビスマルクの支援を享受したことは決してなかったか、あるいは、受けたとしても親密な個人的な交際にすぎなかった。ビスマルクはドイツ国民そのものもまた好きではなかった。シェイクスピアの悲劇「コリアレオナス」(「古代ローマのコリオラヌスの伝説を題材にした悲劇作品」)よりも頻繁に彼によって引用された詩句は他にはない。そして、このことは彼が国民に対して心のなかでどのように思っていたのか、そのことを最もよく反映しているものだろう。ビスマルクはたしかに普通選挙法を導入したが、しかし、周知のように、その理由は、ナポレオン三世のように、つねに議会において従順な多数派を維持したいと願っていたからにすぎなかった。ビスマルクがその点に幻滅したとき、彼は苦々しくそのことを後悔し、さらに普通選挙法を廃止するために、クーデターを考えたほどであった。労働者保険、つまりビスマルク

クが支持した唯一の社会政策は、彼にとつては——彼はそのことを公言していたが——貧民救済の改善にすぎなかった。そこでの彼の意図は、主として、社会民主党から「帆走の追い風を奪うこと」であった。

ビスマルクのプロイセン・トウームは根深く本物であった。それは主に、彼の出自であるプロイセン・ユンカー・トウームに対する誠実な献身であった。とくにユンカーの社会的・軍事的伝統に対する献身であった。ビスマルクは、ユンカーの政治的支配者としての地位を維持することをつねに考えていたのであり、そして、しきりにユンカーの経済的繁栄のことを気遣っていた。その繁栄を彼が左右できた限りにおいて、降り注いだものが保護関税であり、施し物であり、その他の優遇措置であったにすぎない。所領地におけるビスマルクの社交生活もまた真にプロイセン的であった。終始、対外的には軍事力をふるい、対内的には国家権力をふるうことを目指したビスマルクの政治は、まったくプロイセン的精神に満ちていた。

ビスマルクの言葉を信じるつもりならば、彼の「この上なく慈悲深き封主」(「ヴィルヘルム一世」)に対する封臣としての忠誠が、彼の行動の唯一の原動力であった。しかしながら、ビスマルクがかなりたやすく自らを忠誠者に仕立てることができたのは、この上なく慈悲深き封主のおかげであることは認めなければならぬ。自分の陪臣に陪臣がよいと思うことを行わせる封主は、むしろその誠実さのゆえに大いに賞賛されるべきである。ビスマルクがきわめて個人的な政治を行う際に始終國王を、そして後には皇帝を前面に担ぎ出したことは、彼にとつて大き

な利益をもたらしした。ビスマルクに向けられたどの反対も、それは君主に対する反対だと言ったり、自分の政敵を共和主義者だとか反逆者だと罵倒したりすることができたからである。ビスマルクはそれを自由自在に利用した。その後、扱いにくいヴィルヘルム二世が帝位についたとき、もはや「この上なく慈悲深き封主」については何も語られなかった。そして、ビスマルクは解任後、およそ自分が大いに誹謗した共和主義者の一人のように、封主に対して反対した。それに関して、たしかに彼の言うことは終始正しかったが、しかし、それは別の問題である。ここでの問題は、ビスマルクが封臣としての忠誠について本気であったのかどうか、ビスマルクが君主国における反対者に対し彼の周知のやり方で烙印を押したとき、彼は本気でそう考えていたのかどうか、という問題のみである。

しかしながら、ビスマルクの感情面・衝動面は、彼の人格の謎を解くことに大いに役立てることができるほど十分に強いものではなかった。彼は、まったく並はずれた悟性と、力に満ち溢れた本性とを授かった人であった。それゆえ、彼は、この種のどの人とも同じように、人生を完璧に生き抜き、自分に与えられた天賦の才の範囲内で最善のことを成し遂げるといふ非常に激しい欲求をもっていた。運命はビスマルクを不吉な前兆に満ちた時代に大国家の頂点に据えたのであり、そこで彼は大きなことを成し遂げたのであった。しかし、彼なら、ブラジルでプランテーション所有者として、あるいは、中国で武器工場の支配人として、同じく卓越した仕事を成し遂げたであろう。つまり、ビスマルクは、世間に何らの借りもなく、どこにあって

も表面に浮かび上がってくる人びとの一人であった。彼の深い人間洞察は、陰鬱な人間蔑視と合わさって、妄想や感情や衝動に突き動かされるすべての敵の上をいくはるかな優位を彼に与えた。しかし、それにもかかわらず、ビスマルクはつねに冷淡で思いやりのないプロイセンのユニカーであり、国民の心の欲求を理解することもなく、他人の苦しみに対して同情心をもつこともなかった。彼のなかには人の心を温めたり、人の心を感動させたりするものは何一つなかった。同時代人の賛嘆は純粹に彼の作品の外面に向けられていたのであって、そこにおいて統御していた精神は誰の心をも魅了することはできなかった。それと、フランス革命の国政家たちやナポレオン三世さえもがフランスをそれによって満たす術を心得ていた思想や感性上の価値、イギリスの政治家たちがイギリス世界帝国を今日の高みに押し上げたときに用いた思想や感性上の価値、諸民族の混ざり合った合衆国が日々一つの偉大で自覚をもった国民になる際の手助けとなった思想や感性上の価値とを見比べてみるとよい。その種のものはビスマルク的ドイツには何一つ見出されなかった。ビスマルクを見て一番に思い起こされる人物はルイ一四世である。死後になつてはじめてそうなったにせよ、彼を提えた運命は、多くの点でも太陽王の運命に類似している。すでにゲフケンGeffkenがかつて大声で次のように叫んだことがあった。「たった一つでもいいから、ビスマルクの高貴な特徴を見せてくれ！」と。それによってゲフケンは正しいことをも言い当てていた。そのプロイセンのユニカーに最も欠けているもの、それは、当の本人が最も自慢していたもの、すなわち高貴さで

ある。

ビスマルクが時おり抑えきれなくなった唯一の激情は、憎悪であつた。この衝動によつて、彼は時々無思慮な言動さえへと駆り立てられた。エドゥアルト・ラスカーがアメリカの地で客死した折りに、アメリカ議会在ドイツ帝国議会对して哀悼の意を表明したとき、ビスマルクはその弔辞を帝国議会对に回付することを拒否した。そして、その理由を帝国議会で述べたが、その演説はとて人々の心を傷つけるものであつた。その演説は、疑いなくアメリカ合衆国との良好な関係を危うくさせるものであつた。ビスマルクはそのなかで(ラスカーと自由主義に対して数限りなく非難攻撃をした後)、議会和と議会の交流は許されていない、と述べている。いったいそんなことがどこに書かれているのか? 議会相互の交際、とくに祝辞や弔意の表明は毎日のように行われている。何らの結果も伴わない単なる無害な礼儀正しさのようなものは、そのように精力を費やす価値もないものであつた。しかし、ラスカーは自由主義者であり、ユダヤ人であつた。また彼はまったく誠実な人であつた。それゆゑ、しばしばビスマルクと衝突した。ラスカーはドイツ帝国建設に若干の関与をしていた。そして、時おりそのことを主張した。ラスカーは長い間反対派にいた。合衆国は大西洋によつてドイツから分け隔てられていたが、ドイツ帝国議会はすぐそばにあり、議会对に苦言を呈するいい機会であつた。ビスマルクはそのとき演説の機会を見送ることはできなかったのだらうか? ビスマルクはドイツ国民に対して半世紀の間、彼の精神のスタンプを押しつけてきた。一般的にある国民の特徴がどのよう

な部分から構成されているのかはさておこう。しかし、その特徴が、平均をはるかに上回る人物一人ひとりが国民大衆に及ぼす印象によつていかように形作られるかは、見逃すべきではないだらう。知らず知らずのうちに全国民は偉大な人びとのまねをするものである。かくして、一八七一年以降のドイツ人に生じた、とてつもなく大きな、そして、全体的に見てきわめて不愉快な変化が説明できるのである。ドイツの政治家のみならず、ドイツの工業家、ドイツの商人、セールスマン、教授たちもまた、彼らは皆、プチ・ビスマルクになつてしまつた。それ以前はドイツ人にはまったく疎遠な考え方であつたが、成功一般は「力の問題」(Machtfrage)に他ならないという考え方が生まれた。その結果は政治における結果と同様のものではあつた。つまり、やがてドイツ人は至るところで敵をもつたが、誠実な友人はどこにもいなくなつたのである。今日では、このやり方が致命的な誤りであつたことはドイツでも知られている。

ビスマルクの創造物は、半世紀経つてか経たないうちに崩壊してしまつた。(ジョージ・ワシントンの作品は、ほぼ一五〇年経つた今日もなお存続している、しかも、かつてより強力になつて。それを歴史の偶然に帰したいと思う者には誰であれ、それで十分である。しかしながら、それが正しいとされるのは、人格的なものが偶然の存在である場合のみであらう。しかし、人格は社会にしっかりとつながれているものである。ワシントンの代わりに軍部出身の將軍を考えてみよう。彼ならば、ワシントンと違つて、自分に差し出された王冠を受けとり、一王朝を建てたであらう。彼および彼の後継者たちならば、当時まだ

自らの特殊性をととても誇りに思っていた他の連邦諸国の心を惑わせ、全体国家におけるそれらの上昇を妨げるために、彼らが自分たちの権力の支柱をそこに見出す、当時半封建的であった南部諸国の一つを優位な立場へと押し上げたであろう。彼らならば、イギリスの脅威がいつも差し迫っていると言いつて、それを理由に強力な軍隊を作ったであろう、そして、そのわりには他の使い道もなく、商取引を、あるときにはカナダと、あるときにはヨーロッパ諸国あるいは南アメリカ諸国との商取引を絶えず求めたであろう。彼らならば、できる限り議会の勢力を奪っておき、連邦は人民からではなく、栄光に満ちた祖先とその軍隊によって建国されたことを絶えず議会に刷り込んでいたであろう。合衆国であったなら、久しい以前にすでに独立の諸国家に解体していたか、あるいは、——唯一の南北戦争の代わり——多くの混乱やクーデターや革命を経てようやく統一された自由国家へと努力して登りつめたであろう。ドイツは現在、合衆国がワシントンを大統領に選出した地点に立っている。ビスマルクの作り上げたものはたしかにすっかり片づいてしまった。つまり、ドイツは一八四八年の民主主義者と自由主義者の理想に立ち帰り、そうすることでワシントンおよび合衆国の共同建国者たちの理想に近づくのである。今日ドイツは合衆国のように、幸運に恵まれるだろうか、どうであろうか？ その道は〔合衆国よりも〕はるかに困難な状況下で始まっている。そして、万一ドイツがもはや合衆国のように偉大になれないとすれば、それはまさしくビスマルクおよび彼の崇拜者たちの悲劇的な責任である。

わたしは、ドイツ国民である友人たちと歓談するなかで、しばしば、ある発言を「一九世紀最大の国政家は……」という言葉で始めることで面白がった。いまや誰しも、わたしがビスマルクと言うだろうと期待していた——しかし、私はグラッドストーンと言つてやるのだ。ところで、この冗談はじつは本気なのである。わたしはグラッドストーンをビスマルクよりもはるかに偉大な国政家だと思つている。グラッドストーンにしても、可能であつた限りにおいて、まったく自覚をもつて倫理的諸原則を政治へともち込んだ最初の政治家であつたからである。それによつて、彼は人類に対し新時代を告げたのであつた。

訳註

(1) フランツ (Constantin Franz, 1817-91) 〓ドイツの政治評論家、哲学者。プロイセン外務官僚のとき、その思想のため解職され(一八五六年)、その後、評論家としてプロイセン主義の政策に反対する。大ドイツ主義か、小ドイツ主義か、国家統合か、連邦国家かというドイツ問題について、フランツは連邦主義のドイツを基にした「国民連合」のヨーロッパの構築を提唱した。そして「ビスマルク体制」を正道からの逸脱とみなし、ビスマルクを批判するも、彼の思想はドイツ帝国が崩壊するまで同時代人には受け入れられなかった。

(2) ブライス (James Bryce, 1838-1922) 〓イギリスの政治家、文筆家。オックスフォード大学ローマ法欽定講座

担任教授(一八七〇—一九三年)を務める。自由党議員として下院議員となり、グラッドストーン内閣の下で活躍。後には駐米大使(一九〇七—一二年)ともなる。主著: The Holy Roman Empire, 1864; Modern democracies, 1921. 本文引用は The American Commonwealth 一八八八年刊。

(3) パーマストン(Henry John Temple Palmerston, 1784-1865)はイギリスの政治家。イギリスの外交政策を三〇年以上にわたって支配し、自由主義の興隆期にあたって大陸の自由主義運動を援助し、また、イギリスの国権拡張を旨とし、大いに国民の人気を博したが、国内改革には反対した。

(4) 普伊同盟は一八六六年四月にプロイセンとイタリアとの間で結ばれた攻撃同盟条約によれば、イタリアは普伊間に武力衝突が起こるやオーストリアに宣戦布告することを約し、両国は相互の同意なくしては講和や停戦を結ばぬことを保証し合った。その際、プロイセンがそのような同意を与える義務を負うのは、オーストリアがヴェネチア王国をイタリアに割譲するとともに、それと同等の価値をもつオーストリア領をプロイセンにも譲渡する場合のみであると明記されていた。つまり、普伊戦争の講和条約のなかでオーストリア領土のプロイセンへの割譲は行われなかったため、ビスマルクにとってはイタリアとの約束履行の条件が生じなかったことになる。

(5) フリートユング(Henrich Friedjung, 1851-1920)は

オーストリアの歴史家、ジャーナリスト。ユダヤ人商人の家に生まれ、プラハ、ベルリンで大学を終えた後、ウィーン商業専門学校で歴史とドイツ語を教えるが、政治的理由から解雇される。その後七〇年代末から九〇年代半ばにかけて政治活動に励む。『ドイツ週報』や『ドイツ新聞』の編集者になり、ドイツ国民主義運動に参与するが、後にその運動の反オーストリアや反セミアスムの傾向のゆえに離反する。ビスマルクを崇拜する。

(6) グラッドストーン(William Ewart Gladstone, 1809-98)は一九世紀イギリスの偉大な政治家。自由主義を信奉し、自由党に所属。四度もイギリス首相となる。

(7) シュネーベル事件(Schnadeleben)はスパイ活動の嫌疑をかけられたシュネーベルというフランスの国境税関吏が、一八八七年四月に職務上の打ち合わせという口実の下でドイツ領内に誘い出されたものの、あやうくフランス領に逃げ戻った。しかし、ドイツ側はフランス領内にまで追いかけ、国際法を無視して逮捕した事件である。ビスマルクは後に釈放する。

(8) カロリン諸島紛争(Carolinenstreit)は一八八五年カロリン諸島の植民地化をめぐる起きたドイツとスペインとの紛争。ビスマルクが教皇に仲裁を依頼し終結する。

(9) フランクフルト講和条約は普仏戦争の講和条約(一八七一年五月)。アルサス・ロレーヌ地方の割譲、多額の賠償金の支払い、その支払いのための保障占領など、フランスにとって過酷なものであった。

- (10) 冷たい放水 (Kalter Wasserstrahl) 〓たとえば、フランスの急激な再興・軍備再編成に直面し、予防戦争の脅しともとれる発言をすることでフランスを牽制した一八七四年のビスマルクの行動。
- (11) クラウゼヴィッツ (Karl von Clausewitz, 1780-1831) 〓プロイセンの軍人。近代戦を分析した名著『戦争論』は有名である。
- (12) デイズレーリ (Benjamin Disraeli, 1804-81) 〓イギリスの政治家、文人。保守党に属し、二度首相を経験する。グラッドストーンに対抗する。
- (13) プラハ講和条約 〓プロイセンーオーストリア戦争の講和条約 (一八六六年八月)。領土は要求せず、ドイツ連邦からのオーストリアの排除、シユレスヴィヒ・ホルシュタインのプロイセンへの併合、若干の補償金を要求しただけであった。
- (14) プラハ講和条約第五条において、北シユレスヴィヒの住民には自由投票によりデンマークに合流する権利が認められていた。
- (15) クリスピ (Francesco Crispi, 1819-1901) 〓イタリアの政治家。首相としてドイツ、オーストリア、イタリヤの三国同盟 (一八八二年) を強化し、フランスとの通商条約の更新を回避したため、フランスとの関係が一時悪化した。
- (16) ベルリン会議 (一八七八年七月) 〓露土戦争の結果、ロシアによるバルカン進出に反対するイギリス、オーストリアとロシアとの仲介をビスマルクが買って出た会議。これにより、セルビア、モンテネグロ、ルーマニアが独立し、ロシアは僅かにベッサラビアなどを得たにすぎなかった。そのため、ロシア、オーストリア、ドイツはかつての三帝同盟関係から一転して対立関係に至った。
- (17) 一八八七年六月の独露再保障条約は、ドイツがフランスを、ロシアがオーストリアを攻撃する場合以外、両締約国の一方が第三国と交戦するときには、他の一国が好意的中立を守ることを約束し、三帝条約を二国間に限定して再確認するものであった。
- (18) 独墺同盟 (一八七九年一〇月) では、条約国の一方がロシアから攻撃を受けた場合、両国は全兵力をあげて相互に支援することを約していた。
- (19) たとえば、ロシアが黒海の出口における利害の防衛を決定したとき、ドイツはこれを支持すると保証していた。
- (20) ゴルチャロフ (Aleksandr Mikhailovich Gorchakov, 1798-1883) 〓ロシアの外交官、政治家、公爵。一八七四年から七五年にかけてビスマルクが戦争をちらつかせて「戦争、眼前にせまる」報道) フランスの軍備再編成を思いとどませようとしたとき、ロシア皇帝とゴルチャコフが介入し、フランスを支援して、ビスマルクの思惑を阻止した出来事があった。
- (21) ボーア戦争 (一八九九一―一九〇二年) 〓南アフリカのケープなどを領土としていたイギリスは、奥地のボーア人両共和国にも露骨な干渉を行い、ついに両者との間に

戦争が勃発。これに勝利したイギリスはローデシアを含めて南アフリカ一帯を支配下におくことに成功した。列強の世界分割、アフリカ分割の締めくくりとなる事件とされる。

(22) 原文では、*angeklebte* となっているが、文脈から誤植と判断し *angeklebte* と読んだ。

(23) たとえば、ビスマルクは墓石に「ヴィルヘルム一世の下僕だった」と刻ませた。

(24) ゲフケン (Friedrich Heinrich Geffken, 1830-96) はドイツの政治家、法律家。ボン、ゲッティンゲン、ベルリンの各大学卒業後、ハンブルクの外交部に勤め、パリ、ベルリン、ロンドンに駐在する。ボンの学生時代に知り合った皇太子(フリードリヒ)派に入り、反ビスマルクの立場に立つ。一八六九年―七二年ハンブルク州政府の法律顧問を務める。イギリスをお手本とするプロイセン改革や、皇太子の考えとも一致する「統合化」を主張する。かくして一八八八年ゲフケン事件を起こす。フリードリヒ三世の皇太子時代の戦中日記の一部を公表し、皇帝が中央集権主義の思想をもち、ビスマルクの連邦主義の思想とは対立していたことを暴露したのである。そのため、ビスマルクにより国家大逆罪などで告訴されたが、無罪の判決を得る。一八七二年―八二年にはロッゲンバッハに呼ばれ、シュトラスブルク大学の国家学・公法の教授を勤める。

(25) ラスカー (Eduard Lasker, 1829-84) = ドイツの自由

主義的政治家。進歩党に所属後、国民自由党をミークェルと創設し、帝国議会議員として活躍する。ビスマルクの反対者であった。

〔訳者あとがき〕

本稿は、Eugen Ehrlich, *Bismarck und der Weltkrieg*, Zürich 1920 (Verlag: Art. Institut Orell Füßli) を訳出したものである。原文でアルファベットの字間が開けられた強調部分は、訳文では傍点を付した。丸括弧() は原文のものである。註はすべて訳者によるものであり、簡単な補足は本文中に〔 〕で挿入した。

著者のオイゲン・エールリッヒについてはもうここで贅言を要しないであろう。エールリッヒは、わが国では戦前からつとに知られており、その研究も多くなされ、また名著『法社会学の基礎理論』をはじめ、『法律的論理』や『権利能力論』の他、主要な著書・論文もまたほぼ邦訳されているからである。わが国で知られている、これらエールリッヒの著作物は、もちろんすべて法学関係の著作であり、ここにはじめて訳出されたものが、彼の唯一の政治的論稿といってもいいものである。本著冒頭でエールリッヒ自身述べているように、本著以前はもっぱら法学関係の仕事に没頭しており、政治的論文はいっさい書かなかつたからである。実際、*Beiträge zur Theorie der Rechtsquellen* (1902), *Freie Rechtsfindung und freie Rechtswissenschaft* (1903), *Die freie Rechtsfindung* (1906), *Die Rechtsfähigkeit* (1909), *Grundlegung der Soziologie des*

Rechts (1913), Die juristische Logik (1918) の作品群が物語るように、それまでは法律学の著作が着実に発表されてきており、本著は一九二二年に死去する彼の最晩年の作品でもある。

法律学の研究に邁進してきたエールリッヒをして、いったい何が本著のような政治的論稿を書かせたのか。いうまでもなく、一九二〇年という発表年に深く関わりがある。当時の彼がおかれていた経済的苦境の下での執筆動機としては、やはりその時代の状況が主たる大きな理由と思われる。一九二〇年当時のドイツの置かれた状況がいかなるものであったのか。周知のように、一九一八年一月ドイツは自らを引き起こした世界大戦で敗れ、皇帝ヴィルヘルム二世はオランダに亡命し、首都ベルリンでは共和政が宣言される。いわゆるドイツ革命の勃発であり、翌一九年一月には古都ワイマールで国民議会が開催され、夏には生存権、社会権を世界ではじめて認めたワイマール憲法の制定、そしてワイマール共和国の発足となった。一方、同時期にはヴェルサイユ条約が連合国との間に結ばれ、ドイツはすべての海外領土・植民地の喪失、エルザス・ロートリンゲンのフランスへの返還、徴兵制の禁止、航空機・戦車・重砲などの保有禁止などを受け入れざるを得ない立場にあった(一三二〇億マルクという多額の賠償金は一九二一年五月に決定される)。その反面、帝政を倒し、共和政の発足、民主的なワイマール憲法の制定など、激動の時代とはいえ「希望」のもてる時代でもあった。本著の末尾の文章には、そのような自由主義的・民主主義的なドイツの再生に将来の希望を託したいというエールリッヒの気持ちがよく表われている。

エールリッヒ自身も戦争の被害をともに受けている。一九一五年エールリッヒの故郷であるプロヴィナの首都チェルノウイツも、戦場となって焦土と化し、彼は研究ノートや資料を失い、ウイーンに避難する。その後は経済的窮乏と持病に悩みつつ、ヨーロッパ各地を転々とする羽目に陥る。一九一八年頃にはスイスのチューリッヒに滞在し、本著も同地で出版されている。プロヴィナ地方は大戦後ルーマニア領となり、急激なルーマニア化が進められた。一九二二年にエールリッヒはチェルノウイツ大学に帰任するも、翌二二年五月二日にウイーンで客死している。

さて、エールリッヒによれば、ドイツの再生のためには、ビスマルクの遺産およびプロイセンのものを清算することが何よりも肝要であるとされる。ビスマルク政治の本質は、実力と武力、最終的には戦争に訴えてまで相手を屈服させることであり、それはフリードリヒ大王以来の古プロイセン的な伝統的路線であった。ドイツ帝国の憲法体制は、そのプロイセンに外交や軍事などの点において優越的地位を与え、ユンカー層の有する政治的社会的に支配的な地位を維持するという構想の下に仕組まれていた、とされる。ビスマルクにとって、国民の思いや世論や社会の潮流といった社会の道徳的精神的諸力は「不可量物」として視野の外に置かれていた。そのような社会の道徳的精神的諸力を無視するがゆえに、ビスマルクの同盟政策は、「国民の頭越しに行われる政府間の紙の上だけの同盟」となり、そのはかなさから逃れられないものとなったのである。エールリッヒによれば、ビスマルクの政治が国民や社会に根づいたもの

でない点が多くに非難される。この点で対比されるイギリスの外交的成功は、同国が世界各国から好意をもたれる政策をとってきたことにあるとして、エールリッヒによってもイギリスが賛美される。もちろん、一国の安全保障の原点が各国民から好意・親近感を抱かれることにあるとする見方は、今日の世界にも通用する考え方であるだろうし、ある意味で日本国憲法の理念にもつながるものである。(なお、ビスマルク外交についての近年の研究として、飯田洋介『ビスマルクと大英帝国』(勁草書房、二〇一〇年)を参照されたい。該書は書簡などの第一次史料をも用い、また英国側からも捉えるなど、ビスマルク外交を多面的に捉えている。ビスマルク外交の基本は領土補償と政府要人交渉に重点をおき、それは旧体制下の伝統的な王室外交の延長上にあるものと見ている点は、エールリッヒの見方に通じるものがあり興味深い。)

最終的には実力や暴力や武力で片をつけようとする彼の政治の本質は、ドイツ帝国に併合された諸民族——北シユレスヴィヒのデンマーク人やエルザス・ロートリンゲンの人びとやポーランド人——の取り扱いや、さらにはカトリック教徒や社会民主主義者たちに対する姿勢にも端的に現われている。ただし、その結果得られたものは何かといえば、ビスマルク自身が望んだものとは正反対のものであったという皮肉な結末を迎えるのである。そして、この権力主義的姿勢こそ、プロイセンの、とくにプロイセン・ユンカーの伝統に他ならなかったのである。ビスマルクのかかる姿勢は広くドイツ国民に影響を及ぼし、多くの「プチ・ビスマルク」を輩出するに至ったのであり(成功

するかしないかは「力の問題」であると考える方の広まりはその一例とされる)、それこそドイツの悲劇であった。ビスマルク時代にドイツには真の友人は一人として生まれず、周りにはほぼ敵対者ばかりとなつてしまつたからであり、それはドイツ自らが招いたものでもあつたからである。

最後に、エールリッヒは、敗戦によつてビスマルク体制が崩れた今こそ、ドイツは一八四八年の理想に立ち帰り、イギリスやアメリカ合衆国のような自由国家へと生まれ変わるべきである(言うならば、ドイツのヨーロッパ化の方向での再生である)、また今こそ、そのチャンスだと期待を寄せつつ、本著を閉じている。もつとも、エールリッヒは決して楽観的に述べているわけではない。

上述のようにビスマルク体制を見る視点そのものは、後年の第二次大戦後西ドイツ歴史学の新潮流——ドイツ社会史——と軌を一にするものである。ヴェーラーの『ビスマルクと帝国主義』の刊行は一九六九年であった。また露仏同盟、英仏協商、英露協商によるドイツ包囲網の形成は、ドイツ自らが準備し招いたものであり、ビスマルク体制の延長上に必然的に世界大戦があるという指摘は、またしても一九六一年のフィッシャー・テーゼ(『第一次世界大戦におけるドイツの目的』(邦訳『世界強国への道』)を先取りした感さえある。エールリッヒの慧眼がうかがわれるところであろう。あのフリードリヒ・マイネッケは、第二次大戦後、ヒトラー・ナチズム経験後の考察であり、エールリッヒの時代とは異なるが、次のように述べている。マイネッケは『ドイツの悲劇』(矢田俊隆訳、中公文庫)におい

て、ドイツ・プロイセンの軍国主義の歴史をビスマルク、さらにはフリードリヒ大王やフリードリヒ・ヴィルヘルム一世にまで遡らせてはいるが、ビスマルクそのものに対しては高い評価を与えている。つまり、「ビスマルクの帝国建設は、どこまでも歴史的に偉大な業績であり、かつてそれとともに成長したわれわれが感激してそれに夢中になったことは、われわれにとっていまなお貴重な思い出の種となっている」(同上、九五頁)とか、「もしもビスマルクの慎重さと賢明な用心深さが、かれの後継者たちのヨーロッパ政策や世界政策においても用いられたならば、われわれは帝国主義時代の危険地帯をも損傷をこうむらずに通り返し、そしておそらくまた、われわれの内部の損傷の治癒においても歩を進めることができたであろう」(九六頁)、と。したがってマイネッケにとって、ヒトラーはドイツ史の必然ではなく偶然であり、それは「悪魔の原理」(三〇頁)であった。このようなマイネッケと比べても、エールリッヒの先駆性が看取されるところである。

この他、エールリッヒによるつねに社会の視点からするビスマルク批判(この点では、ビスマルクの同時代人として彼の崇拜者となったイエーリングとは好対照である)や、同じくイギリスやアメリカに対する高い評価(イギリスを一つの手本とする見方はすでに一九世紀ドイツにも見られるが、アメリカがかかるものとして登場するのはやはり二〇世紀になってからである。エールリッヒ自身、彼の学問的業績が評価されたのは、まずアメリカにおいてであった。エールリッヒによるアメリカでの講演旅行が計画されていたが、残念ながら、一九一四年七月

の第一次世界大戦の勃発により中止の運びとなってしまった)、またドイツ社会民主党の戦時中の行動に対する幻滅などもまた興味深いところである。いずれにせよ、エールリッヒの「生の声」を聞いたような読後感の残る作品である。